

〈教育相談〉

人間関係形成能力を高める学級づくりをめざした教育相談の研究

— Q-Uを活用したソーシャルスキル育成をめざして —

宜野湾市立宜野湾中学校教諭 友 寄 ゆかり

I テーマ設定の理由

宜野湾市の学校教育目標の主要施策「根づくり教育」では「生命」を尊重する心の育成として、「健康な体をつくり、生命尊重や安全・安心な生活を築こうとする心の育成をめざす」としている。この安全で安心した生活を実現するには個人一人の力だけで達成することは困難であり、周りの人間との関わりや支え合いによって確立されるものである。しかし、人間関係の希薄化が叫ばれている今日、この風潮は学校においても大きな影響を及ぼし、本来友人と様々な経験を共有し楽しく過ごせるであろう学校生活にも変化を生じさせている。児童生徒は学級内で多くの時間を過ごし、そこでまわりの児童生徒にお互いが影響を受けて行動をしている。集団からの影響を受けた個人の行動は、結果的に集団に影響を与えることを考えると児童生徒の人格形成に及ぼす学級全体の持つ影響力は計り知れない。

しかし、現代では人間関係の希薄さゆえに学級内の個々のつながりが弱く、お互いの違いや良さを認めてはいるが、表面的なつながりでしかない場合があり、思いやりをもってお互いが協力できるような望ましい学級集団が組織されていないケースが見られる。そのため、人間関係でトラブルが生じたときに自分で問題を解決できる能力が乏しく、短絡的に友人との関わりを避けたり大人を頼ったりなどの消極的な姿勢が目立ち、いじめや不登校、問題行動などの学校生活不適応を起こす原因になっている。

昨年度、本市の中学校においての不登校児童生徒出現率は2.04%、問題行動等の発生件数は横ばいで依然教育課題の一つとして挙げられる。このような問題の解決には日々の教育活動で、すべての教師が全生徒を対象に人間関係を深める教育相談活動を充実させることが大切である。

本校では年2回の教育相談月間を設定し、生徒の悩みや相談ごとに共感的に耳を傾けるように努めている。また、生徒会活動を中心に生徒に“自己指導能力”の育成にむけて取り組むことによって、自治能力は非常に高まっている。多くの生徒が積極的に諸活動に参加し、学校生活を有意義に楽しく送っているが、まだ一部の生徒において自己肯定感が低く、問題行動等の学校不適応をおこしているというケースがある。教師側も多忙な学校現場において日々の教育相談活動を充実させるには時間的な制限等があり、問題の発生後、一部の生徒を対象に対処療法的な事後対応に終止している現状がある。よって、生徒の問題行動の根本的解決にはつながらず、再び問題行動が繰り返されるケースがほとんどである。

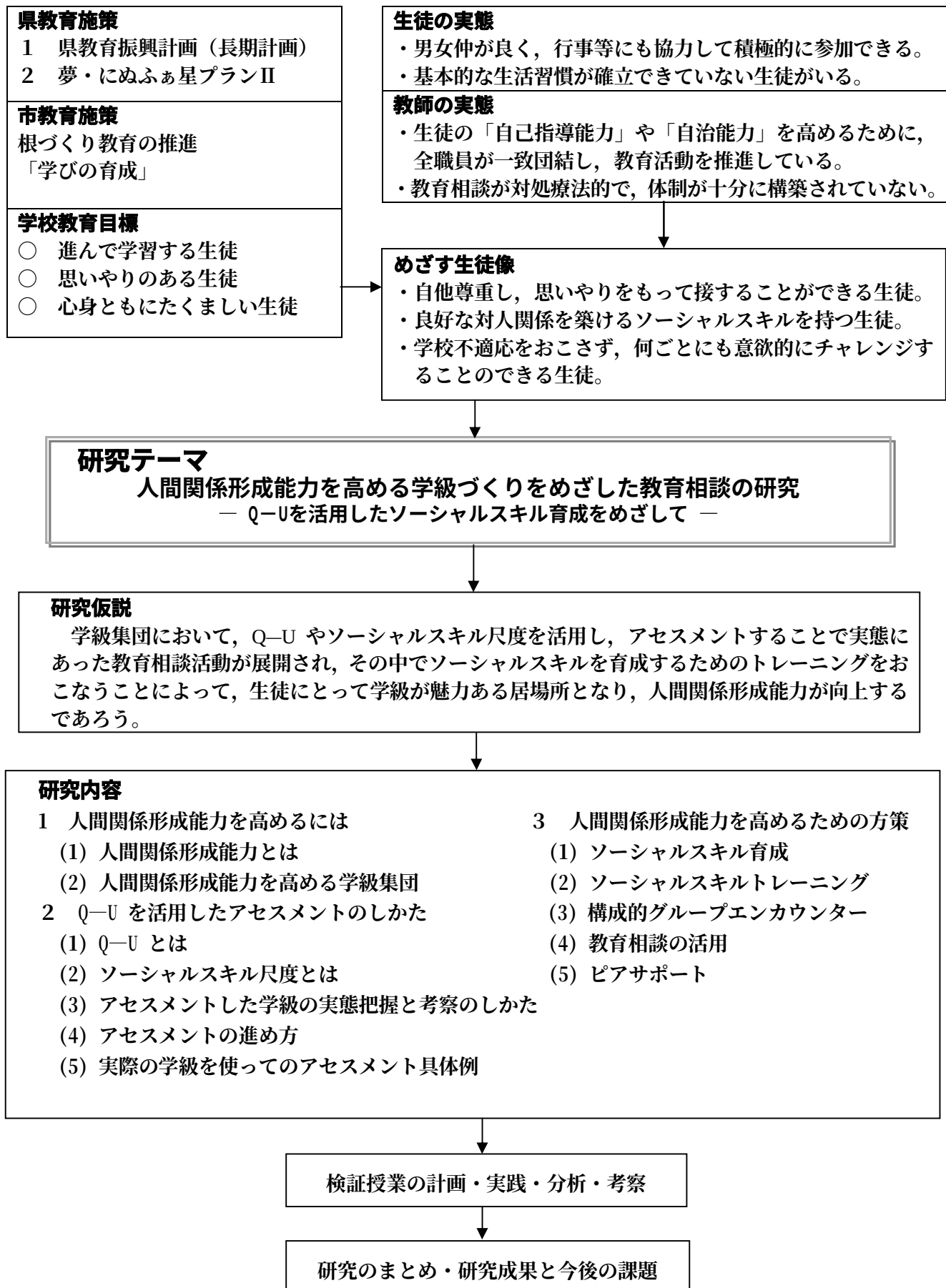
また、生徒理解につながるカウンセリングにおいても養護教諭や教育相談担当、スクールカウンセラー等に依存している傾向が見られ、学級担任が主体的に関わろうとする体制が十分に構築されていない。

そこで、本研究では児童生徒が学級内においてお互いの違いを認め、支え合い、情緒を安定させて過せるような居場所づくりや、対人関係や集団生活のマナーを共有することができる望ましい学級集団を形成し、その中で人間関係形成能力を高めることをめざしたい。Q-U やソーシャルスキル尺度で学級の実態や生徒の学級満足度を把握し、生徒に必要なソーシャルスキルを習得させることで、生徒一人一人の人間関係形成能力を育成し、他者との良好な人間関係を築くことで学級に自分の居場所をつくることができ、問題行動等の学校生活不適応を予防することができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

学級集団において、Q-U やソーシャルスキル尺度を活用し、アセスメントすることで実態に合った教育相談活動が展開され、その中でソーシャルスキルを育成するためのトレーニングをおこなうことによって、生徒にとって学級が魅力ある居場所となり人間関係形成能力が向上するであろう。

III 研究構想図



IV 研究内容

1 人間関係形成能力を高めるためには

(1) 人間関係形成能力とは

キャリア教育では、生徒の発達段階における育成したい4つの能力領域の一つとして人間関係形成能力を掲げている。この能力は社会の様々ななかかわりの中で生活し、仕事をしていく上で基礎となる能力である。特に、価値の多様化や人間関係の希薄さが進む現代社会においては、性別、年齢、個性、価値観等は多様化しており、自他を理解し、お互いに認め合い共に支えあう生活をしていくスキルが必要である。様々な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聞いて自分の考えを調整するとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、より良い社会の一員として能力を発揮することが必要である。

表1 人間関係形成能力

人間関係形成能力	自他の理解能力	・自分のよさや個性が分かり、他者のよさや感情を理解し尊重する。
	コミュニケーション能力	・他者に配慮しながら、積極的に人間関係を形成しようとする。

文部科学省「キャリア発達課題に対し重点的に育成すべき能力・態度の中学校例」では以下(表2)のように述べられている。

表2 重点的に育成すべき人間関係形成能力の中学校例

発達を促すために育成することが期待される能力・態度	
低・中学年	中・高学年
・新しい環境や人間関係に適応する。 ・自分のよさや個性がわかり、他者のよさや感情を理解し、尊重する。 ・人間関係の大切さを理解し、コミュニケーションスキルの基礎を習得する。 ・自分の言動が相手や他者に及ぼす影響がわかる。	・他者に配慮しながら、積極的に人間関係を築こうとする。 ・リーダーとフォロアーの立場を理解し、チームを組んで互いに支え合いながら仕事をする。 ・自分の悩みを話せる人を見つける。

「人間関係形成能力」は、言葉としては、学習指導要領の特別活動の学級活動・ホームルーム活動の内容(2)で示されている「望ましい人間関係の確立」などと共通し、「人間関係形成能力」の育成は、「道徳」の学習内容である「主として他の人とのかかわりに関すること」と深くかかわるものである。

(2) 人間関係形成能力を高める学級集団

人間関係形成能力を高めるための望ましい学級集団とは、学習規律やルールが守られ、生徒同士が互いに関わり、生徒それぞれの人格が尊重され、お互いをより高め合っていくことを指している。

生徒同士が互いに関わっていくためには、学級の環境が整い、生徒一人一人の個性の違いを受け止めてくれる安心できる場所であってはならない。自他ともに認める学級集団の中で生徒は共に学習し、様々な活動や経験を通して自己肯定感を高めていくのである。

人間関係を円滑におこなうための能力を身につけるためには、個人の資質や能力、態度とともに、生徒が所属する学級集団自体がどのような状況にあるのかということは、とても重要な要因となる。

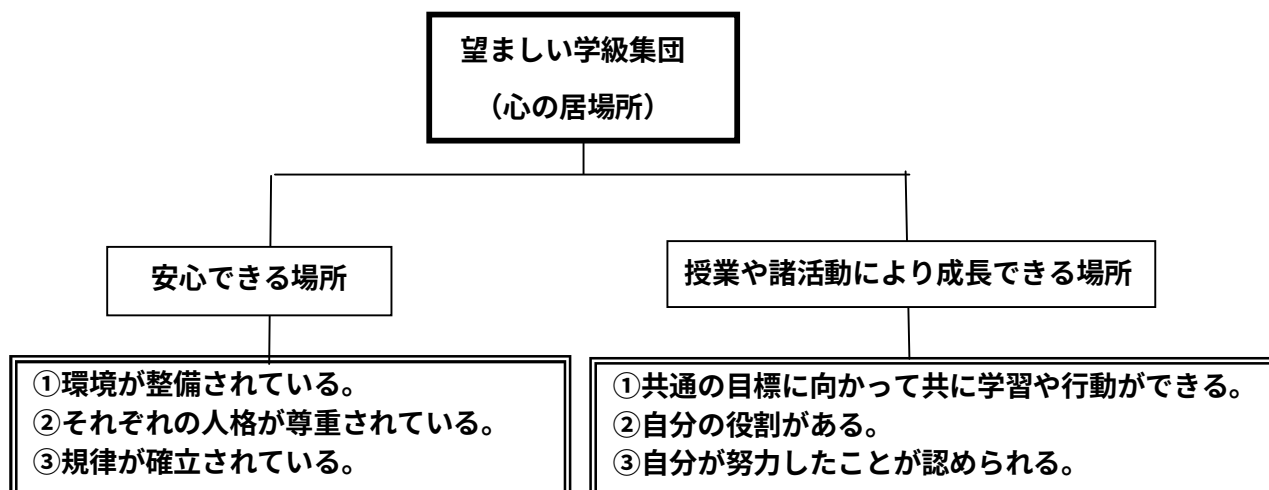


図1 望ましい学級集団の構造図

学級集団を育てるための第一歩は、教師がそれぞれの生徒や学級をどこまで客観的に理解し、把握できているかが重要である。学級集団の状態は、「規律が確立されているか」、「お互いが親しみ、結びついているような人間関係が確立されているか」の2つの視点で見ると、実態が把握しやすい。



図2 ルールとリレーションの説明

そこで、この二つの視点を基に学級の状態を客観的に判断するためにQ-Uを活用することの有効性を以下に述べる。

2 Q-Uを活用したアセスメントのしかた

(1) Q-Uとは

Q-U（Questionnaire—utilities）は、生徒個々の状態及び学級の状態を理解するための客観的な資料を提供することを目指した「楽しい学校生活を送るためのアンケート」である。このアンケートを学級集団におこなうことで、生徒の学級生活の満足度と意欲、学級集団の状態を知ることができ、生徒の内面をより深く理解し、それに応じた手立てを考えることができる。

Q-Uを有効に活用する目標としては

- ①生徒一人一人の内面を理解する。
- ②生徒のタイプによる具体的な対応の方法を知る。
- ③生徒の分布状態から学級集団の状態を理解する。
- ④学級集団の状態から、今後の学級経営の指針となるモデルを得る。
- ⑤いじめ被害を受けている可能性のある生徒を発見し、適切に対応する。
- ⑥不登校に至る可能性が強い生徒を見だし、支援する。

以上の6つが挙げられる。

「居心地のよいクラスにするためのアンケート」

「居心地のよいクラスにするためのアンケート」の結果を図3の分布図に示されるように座標上にプロットすることで生徒一人一人の学級満足度が、①学級生活満足群、②非承認群、③侵害行為認知群、④学級生活不満足群、⑤要支援群のどの群に属しているかが分かり、また学級全体の状態を把握することができる。各群の主な特徴は以下の通りである。

① 学級生活満足群

「承認得点」が高く、「被侵害得点」は低い。この群の生徒は学習意欲、友達との関係が良好で活動意欲が十分にある。

② 非承認群

「承認得点」と「被侵害得点」とともに低い。この群の生徒は認められることが少なく、学級でも目立たないことが多い。

③ 侵害行為認知群

「承認得点」と「被侵害得点」とともに高い。この群の生徒は自己中心的な面があり、人間関係でトラブルが多く、孤立する傾向がある。

④ 学級生活不満足群(要支援群含む)

「承認得点」が低く、「被侵害得点」が高い。この群の生徒は学級に居場所を見つけることが難しく、いじめや不登校に至る可能性が高い。特に、分布図の左隅に位置する「要支援群」に属する生徒には、特に配慮を要する。

「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」

「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」は、友人との関係・学習意欲・教師との関係・学級との関係・進路意識の生徒の意欲を支える5つの領域について判定し、学校生活意欲総合点として分布図(図4)にして表している。その分布図から生徒の学校生活における意欲や適応度のバランスや高低が分かる。

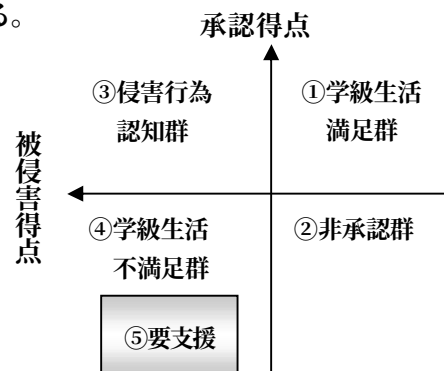


図3 学級満足度尺度分布図

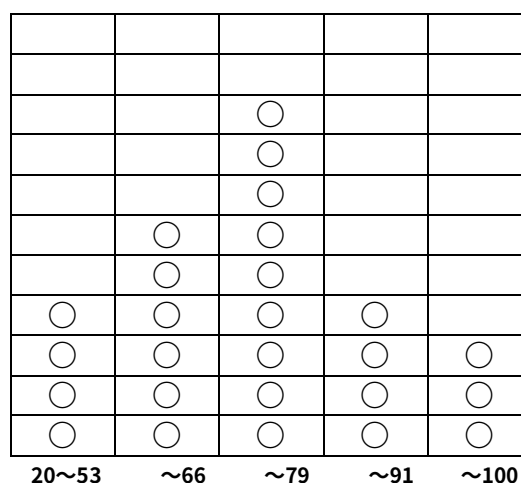


図4 学校生活意欲総合点分布図(例)

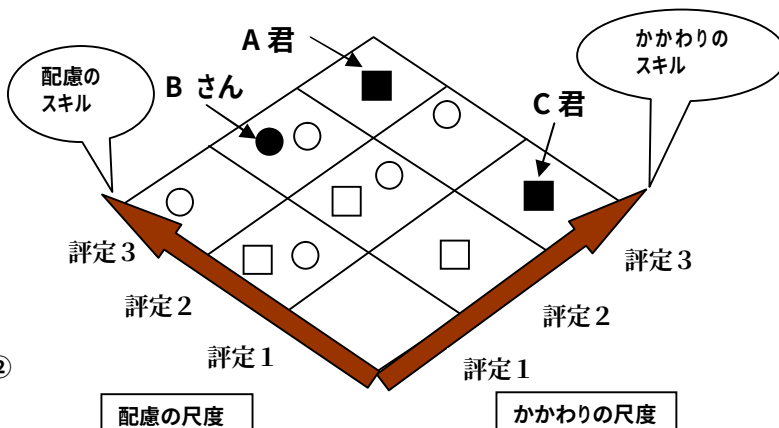
(2) ソーシャルスキル尺度とは

ソーシャルスキル(対人関係を円滑に営むための技術)が、どの程度身に付いているかが分かる。尺度には「配慮」と「かかわり」の2種類の尺度があり、「配慮」の尺度は「他者を尊重する姿勢がありそれを行動に移すことができるか、対人関係の基本的なマナーやルールが守られているか。」を示し、「かかわり」の尺度は「能動的に友人と関わる姿勢があり、『配慮』のスキルを前提に、人と関わるきっかけや関係の維持、感情交流の形成ができていないか。」を示す。この2つの尺度を得点化し、図5のように図や表にすることで学級や生徒のソーシャルスキルを把握することができる。

例えば、ひし形の図の左側に分布が集中していれば「配慮」のスキルが高く、右側に集中していれば「かかわり」のスキルが高い学級と言える。上部に集中する場合、両方がバランスよく備った望ましい学級集団ということがいえる。

番号	名前	3段階評価		ソーシャルスキルのタイプ
		配慮	かかわり	
1	A君	3	3	
2	Bさん	3	2	配慮
3	C君	1	3	かかわり
4		1	2	かかわり
5		2	1	配慮

図5 ソーシャルスキルの結果(例)①, ②



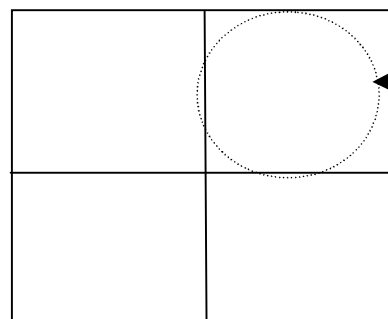
(3) アセスメントした学級の実態把握と考察のしかた

生徒の伸ばしたい良い面やつまずきを的確にとらえ、個々の生徒により良い支援をするという目的でアセスメントはこなう。ここでのアセスメントとは、個人や学級の全体像を把握し、今後の行動を予測し、必要な支援を検討したり、支援の方向性を位置づけるためにおこなう。

プロットの分布が縦軸方向に伸びている傾向があるときは、学級の中で温かい交流が少ないことが考えられ、横軸方向に伸びている傾向があるときは、集団生活を行うための時間を守る、けじめをつけるなどのルールや学習規律、あいさつや給食時のマナー等が定着していないことが考えられる。

① ルールとリレーションが確立している状態

プロットが右上に多く集まった分布を示す。学校生活に不満を感じている生徒は少なく、ルールとリレーションが確立している理想的な学級像である。友人関係が良好で、生徒同士がお互いに認め合う雰囲気を持っている。学習に対しても、積極的に学ぼうとする意欲がある。教師への信頼度も高く、生徒が様々な活動に主体的に取り組む姿勢がある。

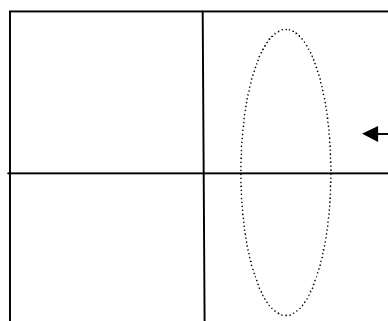


右上に集中して集まっている

図6 ルールとリレーションが確立している状態

② リレーションの確立がやや弱い状態

「学級生活満足群」と「非承認群」に多くの生徒が集まり、プロットが縦に長く伸びた分布を示す。一見、静かで落ち着いた学級に見えるが、生徒の「承認得点」に差が見られる。ルールが、しっかりしているため侵害行為を認知している生徒は少ない。しかし学級の中に認められて満足している生徒と認められずに不満足の生徒が階層化している。この状態のときに具体的な対応がなされないまま経過すると「非承認群」の多くが「学級生活不満足群」に移行することがあり、生徒の意欲に差が埋まれ学級集団に関わりを持たなくなる生徒が増えてくる。



縦に長く伸びている

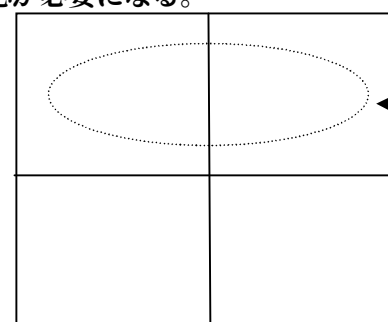
図7 リレーションの確立がやや弱い状態

【対応策】

「学級生活満足群」の生徒であっても、教師の評価を気にしすぎるあまり、適応しなければならぬというストレスを感じている可能性がある。そのため教師側が自己開示をして生徒の緊張感を取り除くように努力する。また、日頃から具体的に生徒を褒めるように心がけ、生徒同士が学級内で認め合えるような場を設定し、人間関係を深めるような対応が必要になる。

③ ルールの確立がやや弱い状態

「学級生活満足群」と「侵害行為認知群」に多くの生徒が集まり、プロットが横に伸びた分布を示す。学級内に満足して生活をしている生徒がいる反面、いじめ被害を受けていると感じている生徒もある程度存在していることを意味する。教師による締め付けが弱いため多くの生徒が認められているという感覚は持っている。



横に伸びている

図8 ルールの確立がやや弱い状態

【対応策】

学級のルールの確立が弱いことが考えられるため、「人の話は最後まで聞く」「暴言や暴力をふるわない」等、生徒が自由奔放にふるまうことを許さず、安心して学級生活が送れるような共通したルールを生徒と確認しながら定着させていくことが大切である。さらに生徒の不満の要因を探り、生徒同士の関わり合いが少ないことが原因である場合は、教師と生徒そして、生徒同士の関わり合いを促進するための活動を積極的に取り入れるなど教師がリーダーシップを発揮することが必要になる。

④ ルールまたはリレーションの確立が弱い状態

ア、「学級不満足群」と「学級生活満足群」にかけて斜めに細くプロットされるように多くの生徒が存在する。すなわち、学級内に教師から認められて学級生活に満足している生徒と学級に居場所を見つけられなくて孤立し、学級生活に対して満足していない生徒の二極化が顕著に現れている。前記の②、③の状態の学級に対して適切な対策を取らず、ルールまたはリレーションの確立がされないまま、退行が進んでいく途中にこのプロットが出現することが多い。学級生活に不満な生徒が意欲をなくし、ストレスの中で他の生徒を攻撃する。同時に不登校や問題行動を示す生徒が増えてくる。

イ、4つの群に散らばってプロットが拡散している。教師には、学級内にいくつかのグループはあるが、全体としてうまくやれている状態と映る。しかし、実際は集団というよりは、生徒がそれぞれの思いで教室内に集められているという状態である。このタイプは、放任型と学級集団への同一化を促す対外的な影響力がとて強い、2つの異なった学級経営方法をとるそれぞれの教師の学級に似かよった型で出現することが多い。

【対応策】

早い段階であれば、ルールまたはリレーションの確立に焦点をあてた対応策で進行を止めることができる。進行した段階になると両方をバランスよく、能動的に対応しなければならない。

＊ルールの確立が弱い状態を改善するためには

望ましい学級集団を目指すために、「ルールとは、集団の中で対人関係トラブルやストレスがなるべく少なくなるように、人が生み出した知恵である。」ことを生徒に理解させて、全ての生徒が気持ちよく過ごせるように、最低限必要なルールを定着させる必要がある。

しかし、学級内にリレーションやルールの確立ができていないために学級が集団として成立できないような状態になっている場合は、指導を強める方法でルールづくりを進めていくよりも一旦、現状をリセットして再度スタートをきるという発想が必要になってくる。そこで、ルールを改めて再確立させるために河村茂雄（2011）が提唱した『再契約法』を以下に示す。

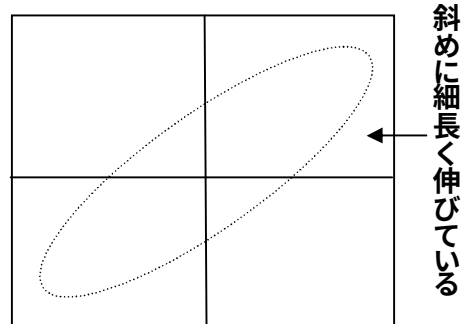


図10 ルールまたはリレーションの確立が弱いア

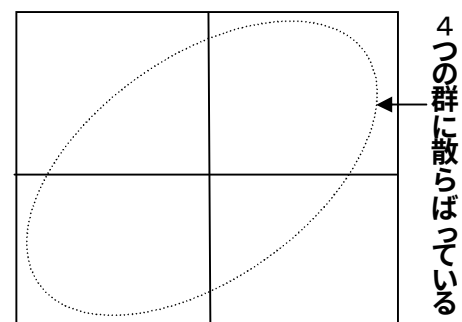


図11 ルールまたはリレーションの確立が弱いイ

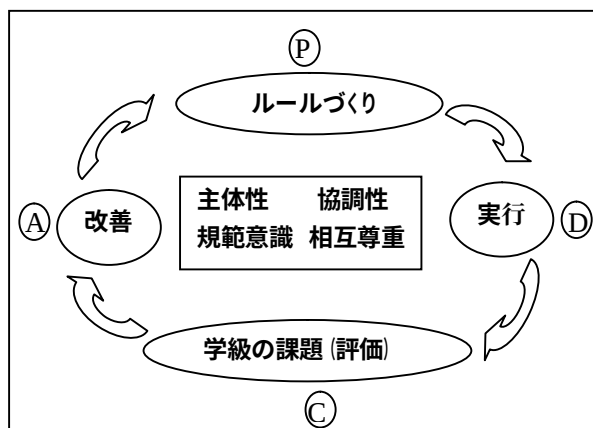


図12 ルールづくりのサイクル

1 教師の自己開示



2 アンケート実施と結果報告



3 問題の明確化と対策



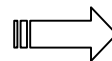
4 ルールの検討

・ 教師が自己開示し、学級の現状についての率直な思いを話す。

・ 生徒の本音を確認するために、困っていること等を無記名アンケートに書かせてプリントか掲示物にまとめて報告する。

・ 明確になった問題点に具体的な改善案を提示し、生徒に同意を得る。

・ 生徒と一緒に具体的なルールの設定をし、学級掲示にして意識を高める。



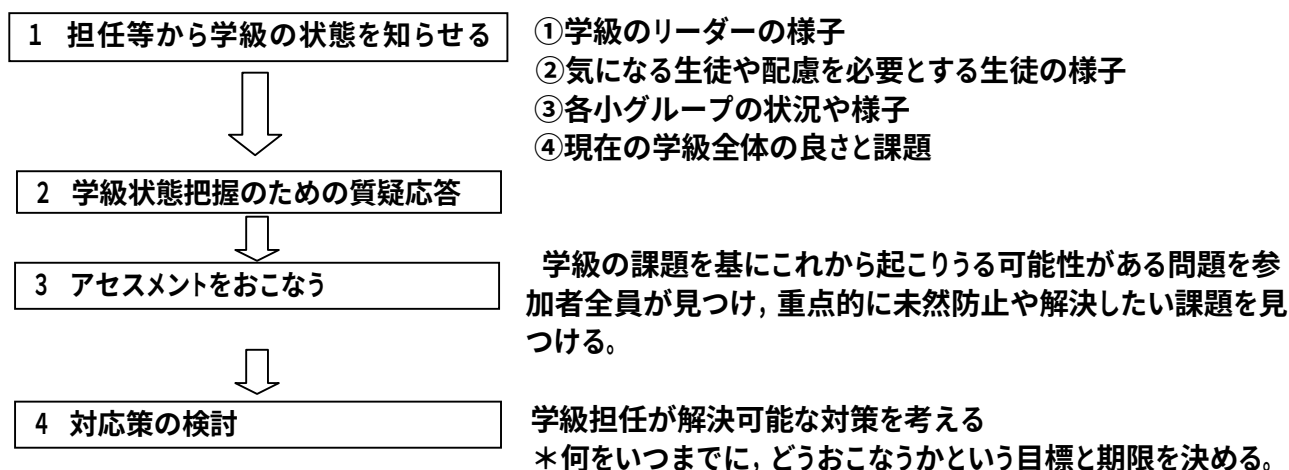
『再契約法』を実施するときのポイントは、生徒の気持ちを受け止め、ルール設定の同意を確認しながら再スタートをすることである。
＊儀式性も大切である。

図13 再契約法の進め方

(4) アセスメントの進め方

学級経営がうまくいっていないと感じるときに、学級集団の状態をアセスメントされることに抵抗を感じる学級担任は少なくない。しかし、学級集団の状態をある程度客観的にとらえなくては、望ましい学級集団をつくる具体的な対応策を見出すことはできない。そこで、アセスメントをおこなう前に学級経営から生じる問題は、個々の学級担任や特定の生徒に問題があるのではなく、学級経営の方針と対応のしかたと、生徒個々の特性と集団の状態との関係性の中に問題が生じていることを参加者全員が共通確認し、このことを念頭に置きながらアセスメントをしなければならない。

【アセスメントの流れ】



【アセスメントする際の留意点】

- ①現在の学級の状態を客観的に理解する。
- ②ゴールや期限は明確にする。
- ③担任が無理なく取り組める目標を設定し、スモールステップでおこなう。
- ④担任以外のサポート源を活用する。

(5) 実際の学級を使つてのアセスメント具体例

① hyper-Q-U の実施

対象 1年〇組 男子 18名 女子 18名 計 36名
調査日 平成 23 年 7 月 13 日

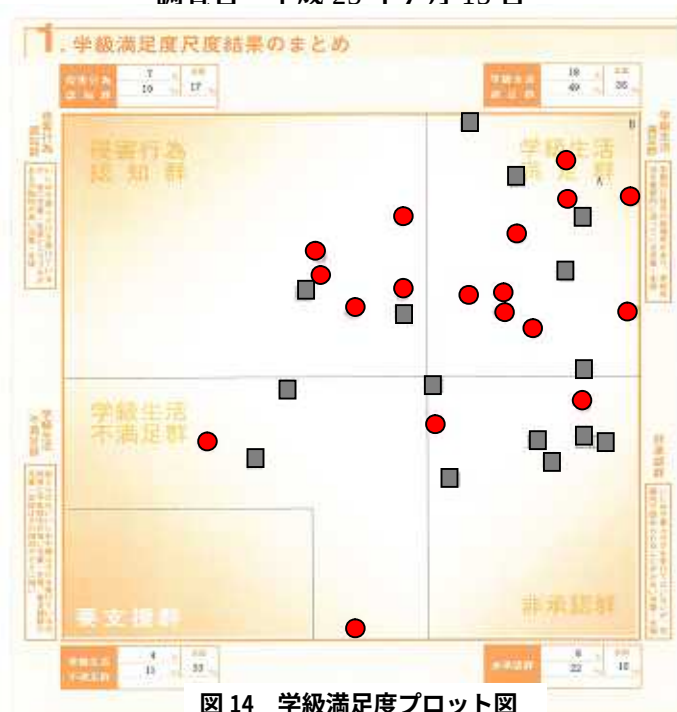


図 14 学級満足度プロット図

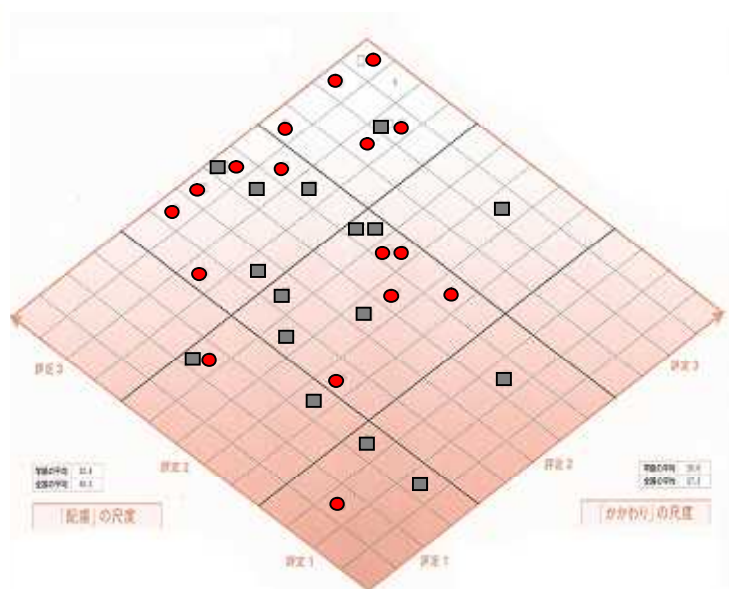
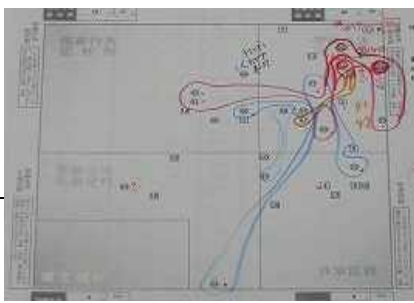


図 15 ソーシャルスキルプロット図

② 診断と考察

事例研究会	
参加者	学級担任, 上級教育カウンセラー, 教育相談担当教諭
学級	1年〇組 男子18名, 女子18名 計36名
プロットより	教師と生徒とのリレーションは良いが, 学級内でのルールの確立に課題が見られる。教師から認められたいと思っている生徒がやや多い。小グループが形成され, グループ内でも違った群の中で階層化している傾向がある。ソーシャルスキルでは配慮の尺度が大きい。
学級の良い面と課題	・学級を盛り上げようとする生徒がいる。 ・係りや当番活動にはほとんどの生徒が参加できる。 ・リーダーが育っていない。 ・いくつかの小グループが形成され, それぞれで行動し, 他の生徒と交わりたがらない。 ・人の話を静かに聞くことができない。 
学級のリーダー	A君 前向きな発言をする。級友から人気がある。彼のムードにまわりが影響を受ける。 B君 お手本になるような行動がとれる。周りから信頼されている。 C君 きちんとした行動がとれる。几帳面である。率先してリーダーシップをとるのではなく, 良いモデルになるタイプ。 Dさん 口が強い。行動力がある。女子の中では, 一目置かれている。 Eさん 口が強い。目立つことが好き。リーダー性はあるが, いまいち上手く周りを引っ張ることができていない。
気になる生徒や配慮を必要とする生徒	F君 情緒が安定していない。LD (学習障害) があり, 多少のことに, 感情を爆発させる衝動性が見られる。 Gさん 狂言をする癖がある。コミュニケーション能力は高い。注意されたことに反発して, 感情を露わにする。 Hさん 友人の悪口を言い, 中心になって仲間はずれにする。他人に対する配慮に欠ける。 Iさん 内向的な性格であり自分の感情を表にださない。一人で行動することが多い。休み時間は一人で本を読んでいる。 Jさん 教師の前と, 友人の前とで見せる顔に違いがある。学級では明るく楽しそうに振る舞っているが, 学級不満足群に属し, ソーシャルスキルも低い。 Kさん 家庭環境が複雑, 問題行動のある先輩との交流があり, 生活態度に問題がある。 L君 小学校では保健室登校であった。友人づくりが苦手である。
学級のグループ	・男子は顕著にグループ化していないが, 同部活同士で好んで集まることもある。(リーダーA君: まわりに影響力がある。) ・女子6名グループ (リーダーDさん: 女子の行動に影響を与える。) ・女子3名グループが1つ。 ＊グループの分布の様子は右の写真を参照。 
目指したい学級	・自他を尊重できる。 ・男女仲良く, いろいろなことに意欲的に取り組む。 ・人の話をきちんと最後まで聞く。 ・問題が起きたときに自分達で考え, 良い方向に向けて解決していく。

以上の事例より対応策を考える。

【対応策】

(学級集団への対応)

- ・リーダーを中心に学級レクを計画し、話し合い活動をさせた後、運営し実行させる。
- ・小集団の枠を外して取り組めるような活動をする。(構成的グループエンカウンター等)
- ・ソーシャルスキルをトレーニングし、人間関係形成に必要なスキルを育む。

(個への対応)

- ・学級担任が教育相談を入れた後、生徒の状況等をみて教育相談担当教諭やスクールカウンセラーと情報を共有し、連携を図りながら支援を行う。

3 人間関係形成能力を高めるための方策

(1) ソーシャルスキル (以下 SS とする。) 育成

人は建設的な人間関係や集団生活・活動の体験を通して、他人や社会とかかわる知識や技術を身につけていく。それは、新たな環境に置かれたときや新しい人とのつながりをつくるときに大きな力となる。このように、自分自身や仲間との良好な関係や集団への積極的なかかわりを創り出すために必要な資質や能力、技術を総称してソーシャルスキル (social skills) ととらえる。学校生活で必要なソーシャルスキル領域を「配慮のスキル」と「かかわりのスキル」河村茂雄 (2008) の二つに大別し、この二つのスキルを習得することで人間関係形成能力の育成を目指す。

学校生活で必要なソーシャルスキル領域

□【配慮のスキル】

対人関係における相手への気遣い、対人関係における基本的なルールやマナー、トラブルが起きた時に、セルフコントロールしたり自省したりする姿勢などの知識やさりげない気遣いの行動が含まれたソーシャルスキル

■【かかわりのスキル】

人とかかわるきっかけづくり、対人関係の維持、感情交流の形成、集団行動に主体的にかかわる姿勢、などの行動が含まれたソーシャルスキル

本研究では、本校の実態に合い学級担任が取り組みやすい、人間関係づくりのスキルを身につけることができるソーシャルスキルトレーニングと自己や他者理解を深めることができる構成的グループエンカウンターを計画的に実践し、教育相談等を活用しながら学級や生徒の変容を検証する。

(2) ソーシャルスキルトレーニング (以下 SST とする。)

SST は基本的な展開として図 16 のように定義される。学級で SST をおこなう場合は、まとまった時間をもってやる方法と短学活や教科の授業等の中の短時間を使って①～④を単独でおこなう 2 つの方法があると定義されている。

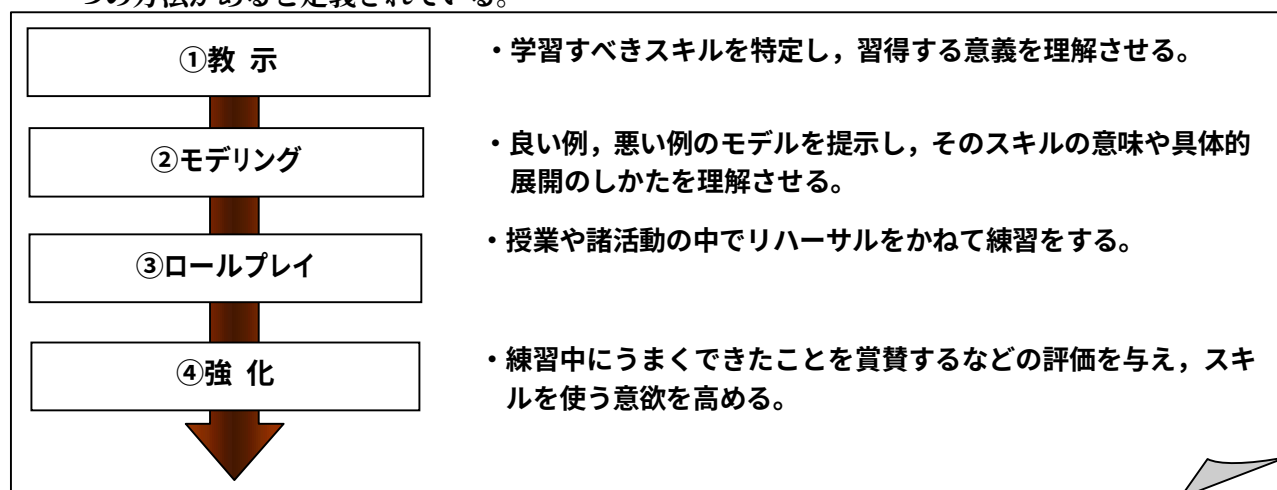


図 16 SST の基本的な展開の仕方

(3) 構成的グループエンカウンター（以下 SGE とする。）

構成的グループエンカウンターは、本音と本音のふれあいによる自他発見を通して、生徒の行動変容を目標とする「集中的なグループ体験」のことである。「人間は心と心のふれあいの中で成長する」という考え方をベースにして、集団の中での体験活動による自己の成長を目的として定義づけている。ねらいを達成するために 6 種類（自己理解、他者理解、自己受容、自己表現、信頼体験、感受性）のエクササイズがある。

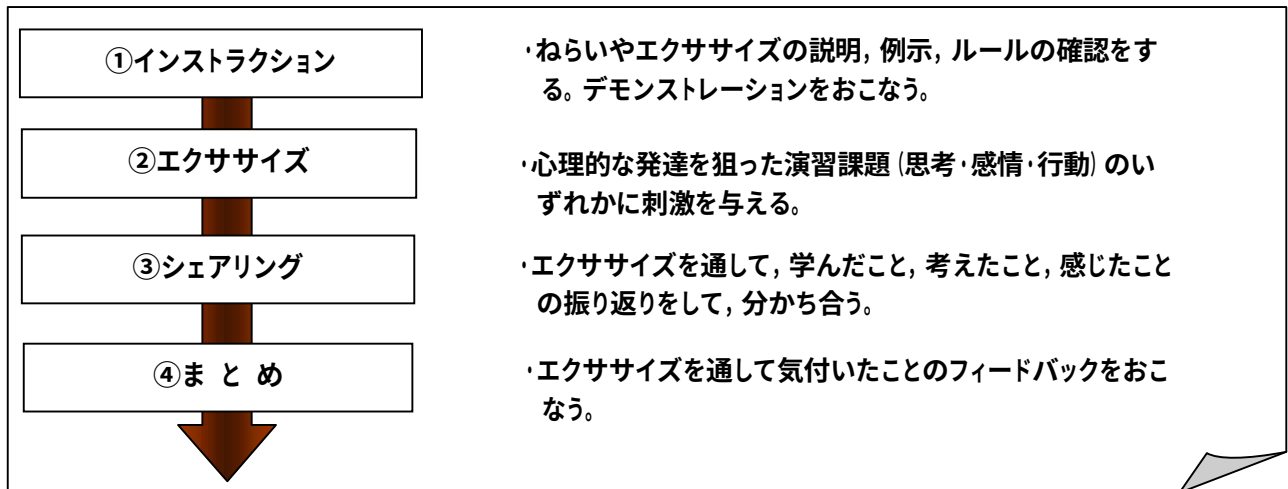


図 17 SGE の基本的な展開のしかた

(4) 教育相談の活用

学校における教育相談活動は、悩みや問題を抱えた生徒への支援という治療的教育相談という側面と、全生徒が学級内で居場所を見つけ、充実した学校生活を送り、生徒自身の成長を動機付ける「育てるカウンセリング」を意識した予防・開発的教育相談という側面の両方の側面を合わせ持つものと考えられ、日常の教師の教育活動に組み込んでいかななくてはならない。以下に教育相談で活用したいカウンセリングの基本的なプロセスを簡潔にモデル化したコーヒーカップ方式（國分康孝 1979）を示す。

《 コーヒーカップ方式によるカウンセリングのプロセス 》

①初期：リレーションをつくる段階（「自分の立場で話を聞いてくれる」という信頼感を持たせる。）

【技法】受容・共感・支持等

②中期：問題の核心をつかむ段階（話に傾聴し問題の核心を洞察する。）

【技法】受容・繰り返し・支持・明確化・質問等

③後期：問題を解決する段階（問題を解決し、適切な処置をほどこす。）

ア、リファール：他の機関や援助者に依頼する。

イ、ケースワーク：環境に働きかけて個人を変えること。（SSW 等を活用）

ウ、スーパービジョン：スーパーバイザーによる指導を受ける。（スクールカウンセラーを活用）

エ、コンサルテーション：情報提供とアドバイス（強制的なアドバイスは生命の危険にかかわる場合のみ）

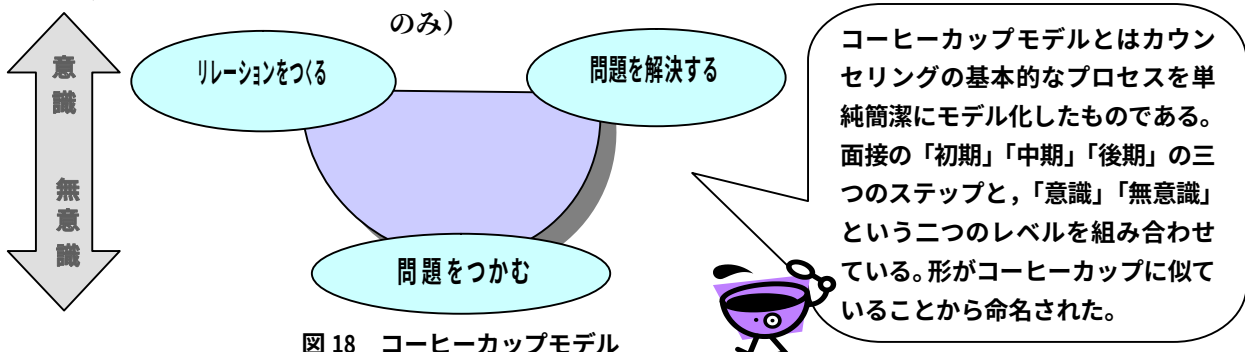


図 18 コーヒーカップモデル

(5) ピアサポート

ピア（仲間）サポートとは、体験的なトレーニングを通して生徒の基礎的な社会的スキルを育て、それによって生徒同士が支え合えるような学校環境をつくることを目的とした「予防教育的生徒指導」のモデルである。いじめを受けて悩む、登校をしぶる、友人関係をうまく結べない等の問題を抱えた生徒に対してトレーニングを受けた生徒が仲間として援助をする。本校では、養護教諭とスクールカウンセラーが協働して生徒会保健委員会のメンバーをトレーニングし、グループリーダーとして育て、生徒同士が支え合える人間関係づくりを試みている。

	日時	テーマ	活動名	内容	宿題
0	9/15				・活動に期待していること ・現在友達との間で困っていることや気になっていること。
1	9/22	ガイダンス	強みを生かそう 	ピア・カウンセリングとは何か？その活動に各自の強み（リソース）をどのように活かしているかについて「ストリングスカード」を用いてグループで考える。	宜野湾中学校の強みを見つける。
2	10/13	自己理解	エゴグラムで自分を知ろう	「エゴグラム」を作成し自分の心の癖を知り、成長のための課題を考える。また、友達のエゴグラムから人それぞれであることに気づかせる。「みんな違ってみんないい」	・母または親友のエゴグラムをイメージし下の①②について考える。 ①そうイメージした理由 ②気づいたこと
3	11/24	自己理解	プラスのストローク・シャワー 	ストロークについて知る。「頑張って達成したこと」について話し、グループのメンバーからリソースをフィードバックしてもらう。そのときの気持ちを感じてもらう。	・プラスのストロークを贈る。 ①贈った状況をまとめる。 ②相手の反応 ③感想
4	12/1	自己理解 他者受容	見方を変える 	見方を変える（リフレーミング）とは。自分自身の欠点をメンバーから肯定的に捉え直してもらうことで自分自身と他者の受容を促す。	・「いやだった体験」または「親への不満」に対して、見方を変えることでプラスの意味づけをする。
5	12/8	自他信頼	良いこと探し 	サポートって何だろう。どんな状況にあっても、やれていることがあり、リソースがあることをワークを通して知る。そのことから相手の力を信じることが相手を支えることになることに気づく。（守秘義務）	・このプログラムを通して学んだこと。 ・どのようにサポートしていきたいかを考える。

V 授業実践

1 指導の実際

	日時・題材	ねらい	スキルと観点	活動内容
1	7月13日(水) 5校時 第1回 Q-U 実施	・学級や生徒の状態を理解するための客観的な資料作成。		1. アンケートをする意義について説明を聞く。 2. 「hyper Q-U」アンケートに答える。
2	10月13日(水) 4校時 解決志向アプローチ (SGE) [道徳 2-(5)]	・自己肯定感を高める。	□配慮 自己受容 (リフレーミング)	1. リフレーミングについて説明を聞く。 2. グループになって「解決志向アプローチ」をする。 3. シェアリングをする。
3	10月31日(月) 3校時 自己紹介とソーシャルスキルトレーニング・個性発見 (SGE) [道徳 4-(4)]	・自己開示の大切さを学ぶ。 ・他者からの肯定的な評価でプラスの自己概念を育てる。	■かかわり 自己表現・自己開示 □配慮 自己受容・他者理解	1. 様々な自己紹介を聞き、自己開示の大切さを知る。 2. ソーシャルスキルの大切さについて学ぶ。 3. 自分や友達の良さや個性を発見する。 4. シェアリングをする。
4	11月2日(水) 放課後 Q-Uアセスメントと事例研究会	・学級の実態把握と対応策を考える。		詳細は、(5) 実際の学級を使っのアセスメント具体例、診断と考察に記載
5	11月9日(水) 4校時 ブラインドデート (SGE) [特別活動 (2)-エ]	・親密な人間関係を築く。	■かかわり 自己他者理解	1. 「男らしさ」「女らしさ」、異性について考える。 2. ワークシートに自己紹介を書き、誰が書いたのかを異性間で当てる。 3. シェアリングをする。
6	12月9日(金) 4校時 エゴグラム (SGE) [特別活動 (2)-イ]	・エゴグラムを用いて自己理解、他者理解、自己啓発を図る。	■かかわり 自己他者理解	1. 「エゴグラム」について説明を聞く。 2. 自分の「エゴグラム」を作成し、解釈する。 3. グループで話し合う。 4. 振り返りシートに記入する。
7	12月14日(水) 4校時 新聞紙タワー (SGE) [道徳 4-(4)]	・グループで協力する楽しさを味わう。	■かかわり 自己他者理解	1. 「新聞紙タワー」の作り方の見本や説明を聞く。 2. グループで協力して、できるだけ高いタワーをつくる。 3. 教師がタワーを測り、互いに賞賛する。 4. 振り返りシートに記入する。
8	12月15日(木) 4校時 話の聞き方 (SST) [特別活動 (2)-オ]	・肯定的な人間関係を築く。	□配慮 聞くスキルを育てる。	1. コミュニケーションの際の言語・非言語の説明を聞く。 2. 教師の良い例、悪い例のモデルを見る。 3. ペアになって、ロールプレイをおこなう。 4. 振り返りシートに記入する。
9	12月21日(水) 4校時 たくさんの葉 (SGE) [道徳 4-(6)]	・人とのかかわりに気付き、感謝の思いを表現する。	■かかわり 自己表現・自己開示	1. 教師の話から普段の人間関係を振り返る。 2. シートを使って、感謝の気持ちを表現したい人に気持ちとコメントを感謝カードに書く。 3. シェアリングをする。
10	1月11日(水) 4校時 無人島 SOS (SGE) [道徳 1-(1)]	・様々な考えを知る。	■かかわり 自己他者理解	1. エクササイズの説明を聞く。(物語の状況を把握する。) 2. シートを使って自分の考えを記入した後、グループで意見を出し合い、意見をまとめて発表をする。 3. シェアリングをする。
11	1月11日(水) 5校時 新年の自分づくり～自分の考えをもつ～ (SST) [特別活動 (2)-キ]	・今やるべき事を明確にし、新たな自分づくりを行う。	□配慮 自己表現・自己開示	1. やるべきことを付箋紙に書き出し、カテゴリー別にする。 2. 各カテゴリーから必要度の一番高いものを3大目標にし、目標を達成するための具体的な計画を考える。 3. グループ内で目標達成の宣言をおこなう。
12	1月18日(水) 4校時 問題解決のシナリオ(SST) (検証授業) [道徳 2-(2)]	・他者との葛藤の中で何が問題なのかを確認し、対処方法を考える。	□配慮 問題解決スキルを育てる。	1. 他者との葛藤の場面の状況を把握する。 2. 問題解決に向けてのシナリオを個人で考えた後、グループで考える。 3. 振り返りシートに記入する。
13	1月18日(水) 5校時 私は私が好きです (SGE) ・自己肯定感アンケート [特別活動 (2)-ウ]	・自己肯定感を高める。	□配慮 自己表現・自己開示	1. 外国と日本の自己肯定感の違いについての話を聞く。 2. シートを使って、自分の好きなところと理由をたくさん書く。 3. グループの中で発表し合う。 4. 自己肯定感アンケートに答える。
14	1月25日(水) 5校時 第2回 Q-U 実施	・学級や生徒の状態を理解するための客観的な資料作成。		1. 「hyper Q-U」アンケートに答える。

2 本時の指導計画 (10/11)

(1) 主題名 問題解決のシナリオ 道徳 2—(2)「温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心を持つ。」

(2) 本時の目標 他者との葛藤の中で何が問題なのかを確認し、望ましい対応の仕方を考える。

(3) 授業仮説

葛藤場面を設定し何が問題なのかを考え、解決するためのシナリオを作成することによって他者との間に問題が生じた場合の望ましい対応のしかたに気づき、生徒がよりよい人間関係を築くために役立てることができるであろう。

(4) 授業の展開

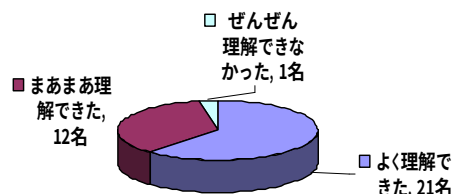
過程	学習内容・学習活動	指導の留意点	■指導の観点・備考
導入 10分	①ウォーミングアップ 「私はだれ？」クイズ	・学級の友人についてのクイズを利用してリラックスした雰囲気をつくる。 ・前時に学習したことを確認させる。	「私はだれ？」アンケートを前時でさせておく。
展開 30分	②ソーシャルスキル(良い話のしかた・聞き方)について再確認をする。 ③本時のねらいを確認する。 ねらい「他者との間に問題が生じた場合に望ましい対応ができるようにしよう」 ④ロールプレイ(生徒による実演)	・「喧嘩をする時に何が原因であるかが分からないときがある。」と切り出し、葛藤場面での対応のしかたの選択が大切だということを説明する。 ・生徒による「ある友人トラブルのケース」のシナリオ朗読、ロールプレイによって興味・関心を引き出させる。 *ナレーター、潤と和也(クラスメイト)役の3名	■道徳的心情 シナリオを黒板に提示する。 シート[1]
まとめ 10分	⑤問題解決の為にシナリオを書き換える。 ⑥シェアリング(グループ)→(全体)	・生徒個々でシナリオを作成する。 ・グループで、お互いが作成したシナリオの意見交換をした後、全体でアイデアを共有させる。 *いろいろな考え方や対応のしかたがあり、よりよい対応のしかたがあることに気づかせる。	■道徳的判断力
	⑦まとめ ・振り返りシートに記入する。	・問題解決に向けてどのような選択肢が、望ましいのかを発表させる。 ・実践に生かしていく意欲や考えを確認する。	シート[2][3] ■道徳的判断力 ■道徳的实践意欲・態度

3 授業仮説の検証と考察

授業仮説について、生徒の振り返りシートと授業観察を基に検証する。

(1) 葛藤場面を設定し何が問題なのかを考えることができたか。

「設問1：思いやりをもって接することが良好な人間関係を築くうえで大切であると理解できたか。」には34名中、33名の生徒が「理解できた。」と回答している。友人間トラブルのケースをクラスメイトのロールプレイを通して実際に目の当たりにすることで自分の体験に置き換えて真剣に考え、相手の立場や考えを尊重せずに、思いやりのない態度をとることが他者との間でトラブルを生じさせる原因になることを理解することができた。



思いやりをもって接することが良好な人間関係を築くうえで大切であると理解できたか。

図19 振り返りシート設問1の回答

(2) 問題を解決するためのシナリオを作成することによって他者との間に問題が生じた場合の望ましい対応のしかたに気付くことができたか。

新しいシナリオを作ってみよう。 問題解決のためのせりふを考えよう。

最初のせりふ	変更した態度やせりふ
③態度：反省した様子もなく答える。 和也 洗ったけれど、落ちなかったんだしー。	きらいに洗ったけれど、落ちなかったから、ごめん
④態度：靴の汚れをまじと見直しながら。 潤 これで落としたって言うるばー。ちゃんとあやまらせていないし。	お前が一生懸命洗ったんだから許してあげなよ
⑤態度：ふてくされた態度で答える。 和也 「ごめん」って言ったし。	ごめんからさくつをよごすことないよ、ごめん
⑥態度：躊躇して靴ひもを替えたことを思い出しながら。 潤 靴ひも変えたばかりだし。	くつてもずらしたらまたかえるからだいじょうぶだよ
⑦態度：誠意なく100円を渡す。 和也 靴ひもとか安いし。どうせ100円ぐらいだろ。	おれがくつてもかいてあげるよ
⑧態度：「話しても無駄だ」というあきらめの気持ちで。 潤 そんなお金のことを言っているんじゃないし。	くつてもたらたら安いからすぐにかうからいいよ。

図 20 問題解決シナリオのワークシート

「設問2：他者との間で葛藤場面が発生したとき、どうすればより良く問題を解決することができますか。」の問いに「態度や言葉遣いに気をつけて、自分の間違っただけ行動を謝る。」と回答した生徒が目立った。

この回答は、相手を思いやりながらやさしい言葉を使うことで問題が解決できる方向に進むであろう、と単純に考えているとも受け取られる。

友人間でトラブルが生じた場合、相手の気持ちを考える前にすぐに謝罪し、許してもらおうと試みるが、その謝罪に対し相手が受け入れられない態度を示したとたんに対応にとまどい、自分の力で問題を解決することに消極的になる傾向があることから、相手の立場になって考える、相手の気持ちを聞いてあげる等、もう少し具体的に深い考え方ができるように指導していく必要があると感じた。

表 3①, ② 設問2への回答 (振り返りシートより抜粋)

自分の思った事をすく相手に伝えるんじやなら、
相手がどう思うか、どう感じ目あるか、を思いついて、
言葉を考えてから、相手に伝える事が分かる。
自分が悪い時は、素直に受け取める。
相手が悪い時は、自分も相手と同じように悩んでいる。

相手にも、自分にも良い方向に解決した方がいいと思いたい。
今までは、解決できなかったらいいと思っていたけれど、
これからは相手のことも考えて、解決していきたいです。

(3) 問題が生じた場合に望ましい対応のしかたを使って解決しようと思ったり、よりよい人間関係を築くために役立てようとする姿勢が持てたか。

「設問3：どんな人間でありたいと思いましたか、またはこれから他者との間で問題が起こったときに自分はどうか行動していこうと考えましたか。」の問いに「なにげない態度や言葉で相手を怒らせてしまうことがあることに気づいた。」「これからは、問題が生じたときには相手の気持ちを考えながら思いやりを持って問題解決にあたりたい。」「相手に誤解を与えたなら、自分の言い分より相手の言い分を聞くことに徹しようと思った。」等、ほとんどの生徒が問題解決に対して積極的な姿勢を示す回答をしていた。このことからより良い人間関係を築くうえで今回の学習内容は有効であったといえる。

表 4①, ② 設問3への回答 (振り返りシートより抜粋)

自分がまちがったことをしたら、相手がやっとうるようなあやまり方ができる人間でありたい。
また、これから他者との間で問題が生じたのであれば、相手のことを考えながら、いい方向へと伝えていきたい。

今日の授業を通して、自分は人を思いやる事ができる人間でありたいと思いました。
もし、自分と他者との間で問題が起きたら、きちんと話し合ったり、他の友達や先生にも相談をしたりする。後、相手の事や気持ちを考えてあげる。

4 授業研究会

(1) 授業者反省

- ・ 道徳・特別活動の領域は、週に一度しかないため、限られた時間内で研究内容をどう検証していけばいいのかと悩むことが多かった。又、学級をまとめるような時間に関わることができない状態で、どのように生徒と信頼関係を築いていけばいいのかという難しさにも直面しながらの実践だった。
- ・ 本時では、普段なかなか発表をしない生徒が挙手していたので良かった。
- ・ 授業後半におけるシェアリングの活動は、もう少し活発にさせたかった。
- ・ 道徳性は道徳の授業のみで育てていくものではなく、全教科・領域を通して育てていくものと捉えているので、今後も担任と連携を取りながら授業をおこなっていきたい。

(2) 意見及び感想

- ・ 生徒がいきいきと活動している様子があった。授業の流れもスムーズで、よく展開が考えられている授業であった。
- ・ 授業導入時の「ウォーミングアップ」は、生徒同士、生徒と教師の距離がぐっと近づいた活動でとても良かった。生徒に提示する「ねらい」の言葉は、少々難しく感じたので、もう少し身近な言葉のほうがいいと感じた。
- ・ 元気者が多く、騒がしい学級だが、今日はよく話を聞いて頑張っている様子があったので驚いた。本時で題材に選んだねらいは、今まさに学級で解決していかなければならないもので良かった。（学級担任）
- ・ 題材として選んだ内容は、教育相談で関わった生徒が抱えた悩みのケースと全く同じで「すごいな」と感じた。今日の授業の題材のように、「言葉をかえて相手に伝える」ことを実践して見事トラブルを解決した女子生徒がいて、その様子と授業が重なり感激した。（教育相談担当教諭）
- ・ 公開授業では普段よく発表する生徒に発表させがちだが、今日は普段発表しない傾向の生徒を授業者が指名してその目立たない生徒が、自信を持ってしっかり発表する姿が見られた。（学年主任）
- ・ 道徳の授業の際に生徒に書かせる「振り返りカード」記入の際は、模範的な文を書く傾向が見られる中で、今日の授業ではそれぞれの生徒が自分の考えを書いていた。本時のように、生徒に考えさせる授業は大切だと感じた。

《質問》「新しいシナリオをつくってみよう」のワークシートに「丁寧な言葉を遣えばいい」と書いている生徒がいた。「丁寧な言葉」だけではなく、心情面に関する言葉がもっと出てくると予想していたのだが、あまり出ていなかったように感じた。「新しいシナリオ」では生徒のどのような反応を期待していたのか。書かせた意図を教えて欲しい。

《回答》生徒の感覚、捉え方、感じ方は様々だと思う。「丁寧な言葉」と書いているのもその生徒なりの感じ方なのでそれでいいと考えている。私は常に、道徳に答えはないと考え、教師の誘導的な回答は言わないようにしている。その生徒なりに、何かを感じて書いたのなら、私はその気づきでいいと考える。道徳の授業では生徒のいろいろな考えを受容するよう心がけている。さらに、1回の授業で道徳性を育てることは難しいが、大切なのはさまざまなねらいを持った授業を通して考えや気づきを積み重ねて実践に活かしていけることだと思う。

(3) 質疑応答・指導助言（宜野湾市立教育研究所指導主事 西 康勝）

- ・ 指導案の中にある指導の観点の中に「道徳的習慣」を挿入し、普段から身につけさせていくというスタンスを大切にしたい。
- ・ 本時の目標「他者との葛藤の中で・・・望ましい対処の仕方を考える。」の部分を成長目標と捉えて、「望ましい対処の仕方を身につけよう」とすると授業者として楽になると思う。
- ・ 様々な場面で道徳性を育てるという観点から「日常化」を大切にしたい。道徳性を育てる素材は様々なところに散らばっている。
- ・ 限られた時間の中でしか関わらなかったはずなのに、授業者と生徒とのラポートがしっかり取れていたのがさすがだと感じた。
- ・ 授業後半にある「まとめ」は生徒の言葉でつなげてまとめたほうがいいと思う。
- ・ 授業者の生徒を引き込んでいく授業力の高さ、人柄、オーラがありすばらしい授業展開であった。

VI 仮説の検証

研究仮説の考察は、振り返りシート等の感想、自己肯定感アンケート（事前10月、事後1月実施）、Hyper-Q-U アンケート（事前7月、事後1月実施）を基に「アセスメントすることで実態にあった教育相談が展開され、その中でソーシャルスキルを育成するためのトレーニングをおこなうことによって生徒にとって学級が魅力ある居場所となり、人間関係形成能力が高まったか」について分析・考察をする。

《考察1》アセスメントすることによって実態にあった教育相談活動が展開されたか。

Hyper-Q-U アンケートとクラス中での個性発見シートから得られた情報や資料をもとにアセスメントし、あらかじめ教師が生徒一人一人の成長目標の見通しを立てたうえで、生徒が自分自身で成長できるような支援を校内で実施される教育相談月間においておこなった。気になる生徒や配慮を必要とする生徒に関しては、スクールカウンセラーや教育相談担当と連携をとり情報を交換し、支援できる体制を整えながら教育相談をおこなえるように留意した。その結果多くの悩みが解決され、学校生活が有意義なものとなる動機づけになったと言える。

(1) 自己肯定感アンケートを通しての検証

本研究のテーマである良好な人間関係を形成するためには他者へ思いやりを持つことは大切であるが、それ以前に、自己理解と自分に対しての思いやり「自己肯定感」を育むことはより重要であると考え。教育相談や生徒の実態から、自己肯定感を高めることが人間関係形成の素地づくりに重要であることを理解し、自己肯定感を高めることも意識しながら授業を実践してきた。「自己肯定感」を推し量るものとして桜井茂男（1983）がハーター（1979）の原尺度に準拠した「認知されたコンピテンス測定尺度（日本語版）」があるが、本研究では、それをベースにして項目内容を検討、再構成し本校の生徒の実態に合った20項目からなる自尊感情測定尺度を作成して「自己肯定感」を測ることとした。採点方法については、「とても感じる4点、少しそう感じる3点、あまり感じない2点、全く感じない1点」として項目ごとに評定を単純加算した。ただし、逆転項目は「4→1, 3→2, 2→3, 1→4」に換算して加算した。得点可能範囲は80点から20点までであり、得点が高いほど自己肯定感が高いことを示している。このアンケートを使って検証授業の効果を見るため、第一回を10/31、第二回を1/18におこなった。

表5 自己肯定感アンケート

No	質問項目	No	質問項目
1	勉強は将来、自分の役に立つと思います。	11	じっとしているより、体を動かすほうが好きです。
2	※友だちをつくることはむずかしいと思います。	12	※もっと違った生き方をできたらいいなと思います。
3	すべての運動がとてもよくできます。	13	※学んだことは、よく忘れます。
4	※できるならば直したい欠点がたくさんあります。	14	私は、クラスの重要なメンバーだと思います。
5	※勉強をやりおえるのにかなり時間がかかります。	15	同じ年頃の友だちより運動はよくできると思います。
6	友だちは多いほうだと思います。	16	友達の中では人気があると思います。
7	※激しい運動や新しい運動には抵抗があります。	17	読んだ本を理解することはむづかしくありません。
8	とても、よい人間だと思います。	18	たくさんの友だちから好かれていると思います。
9	クラスの友だちと同じくらい、頭がよいと思います。	19	※陸上の大会では真っ先に選手に選ばれたことがない。
10	※いつもひとりで行動することが多いです。	20	※あまり自分を大切にしたいと思いません。

（No1, 5, 9, 13, 17）は学習に関すること、（No2, 6, 10, 14, 18）は友人に関すること、（No3, 7, 11, 15, 19）は運動に関すること、（No4, 8, 12, 16, 20）は全般に関すること。 *No2, 4, 5, 7, 10, 12, 13, 19, 20 は、逆転項目。

表6 自己肯定感アンケート各項目平均表

No	1回目	2回目	No	1回目	2回目
1	28.0	30.3	11	28.0	26.5
2	25.0	26.8	12	19.3	21.3
3	18.0	18.8	13	21.5	20.8
4	14.5	17.0	14	19.3	21.8
5	21.8	23.3	15	21.8	18.5
6	26.0	25.3	16	18.0	18.3
7	23.3	25.5	17	23.3	25.0
8	17.8	19.3	18	21.0	20.3
9	17.8	17.8	19	20.8	17.3
10	29.5	28.8	20	26.0	28.0

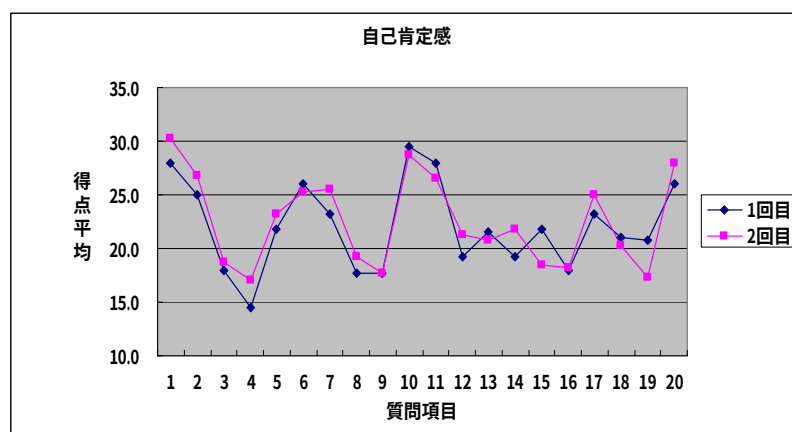


図21 自己肯定感アンケート結果

表6のアンケート評定平均結果を見てみると、20項目中12項目について第一回を上回る数字がでており、少しではあるが「自己肯定感」が高まったことを表している。次に本研究の人間関係形成能力に深く関わっていると思われる感情の質問項目2, 10, 14, 20を抽出して考察を進める。

表7 自己肯定感アンケートからの抜粋項目

		第1回				第2回			
N0	質 問 内 容	とても感 じる	少しそう 感じる	あまり感 じない	全く感じ ない	とても感 じる	少しそう 感じる	あまり感 じない	全く感じ ない
2	友だちをつくることはむずかしいと思います。	1	14	13	8	1	7	20	8
10	いつもひとりで行動することが多いです。	0	5	16	15	0	4	21	11
14	私はクラスの重要なメンバーだと思います。	3	8	16	9	3	14	14	5
20	あまり自分を大切にしたいと思いません。	2	10	14	10	1	5	19	11

項目2「友だちをつくることはむずかしいと思います。」では、第1回では「とても1名、少しそう感じる14名；合計15名」だったのに対して第2回では「とても1名、少しそう感じる7名；合計8名」に減っている。また項目10「いつもひとりで行動することが多いです。」からは一人の生徒が学級で友人をつくることができたことが伺え、項目14「クラスの重要なメンバーだと思います。」では、「とても、少しそう感じる」の合計が11名から17名に増え、学級の中で自分の居場所が見つけられたことを示している。さらに、項目20「あまり自分を大切にしたいと思いません」では、「とても、少しそう感じる」の合計が12名から6名に減り、「自己肯定感」が高まったことがわかる。以上の結果から生徒の実態にあった教育相談活動を展開し、教育実践に役立てることは人間関係形成を育てるために重要な素地となる自己肯定感を高める効果があることが分かった。

《考察2》 ソーシャルスキルを育成すれば学級が魅了ある居場所となり人間関係形成能力が高まったか。

(1) 生徒の行動観察，振り返り・ワークシートを通しての検証

「エゴグラム」を作成することで自分の内面を見つめ性格の癖や周りから見られる自分を客観的に判断し、改善すべき所を知ること人間関係づくりに生かしていこうとする姿勢が見られた。

また、シェアリングを通して友達の性格の癖を知ること、自分と他者の違いを再確認することができた。

表8 エゴグラムワークシート（生徒回答済）

表8 エゴグラムワークシート（生徒回答済）



- ・自分の以外な一面を発見した。
- ・すごく当たっていた。
- ・性格の癖で直したらいい所がわかって良かった。
- ・みんな違っていて面白かった。

(生徒の感想より抜粋)

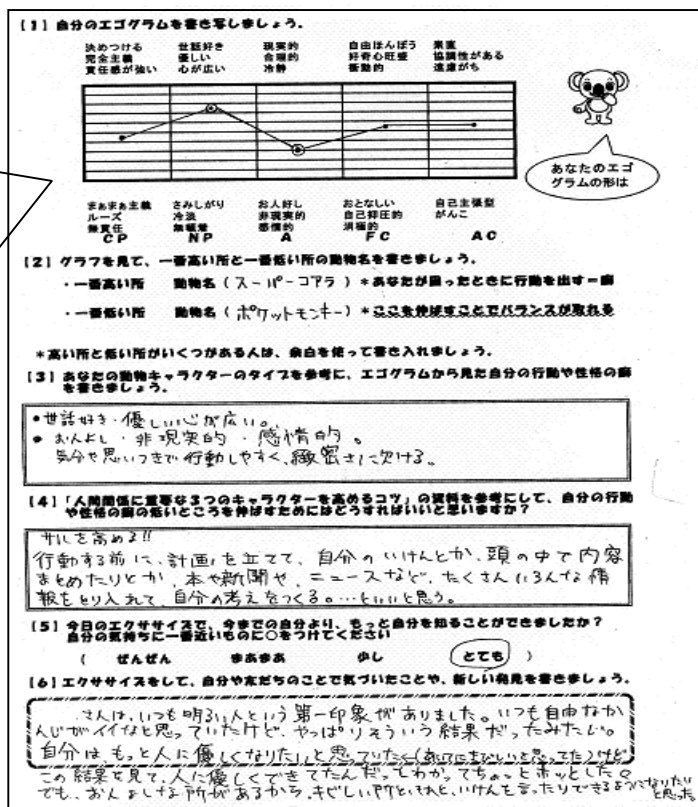


写真1 タイプ別の性格の説明（黒板上）

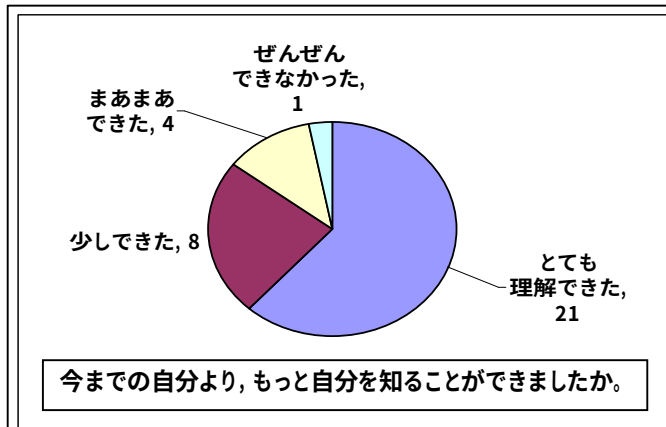


図 22 エゴグラム振り返りシートの回答

「積極的な話の聞き方」の授業では、聞き方のペアワークを通して今までの自分の話しの聞き方を反省する様子が振り返りシートの中から見て取れた。また、他者を大切にする話の聞き方のスキルがあることを知って、今後の人間関係づくりに生かしていきたいとの感想が多くあった。

表9 「積極的な話の聞き方」の振り返りシートより抜粋

【4】今日の授業を通して、友達を大切にする話の聞き方とはどういう聞き方がわかりましたか。または、考えたことや感想を書きましょう。

今日の授業で友達がちゃんと聞いてくれている時には、「やっぱり、友達だねー」と思ったけど、関心がないときは、「きらわれているのかなー」と思ったりしました。きき方の大切さを知ることが出来たので、良かったです。



写真2 聞き方のスキルのペアワーク

「無人島 SOS」や「新聞紙タワー」、「問題解決のシナリオ」の授業のアクティビティでは、グループでシェアリングする際に聞き方や話し方のスキルを意識させて話し合いをさせるようにした。そうすることで、話し合いが以前より建設的になった。また、他人の話をきちんと聞くことで様々な考え方や意見があることに気づき、それをお互いが認めることで友人関係を深め、さらに広げることもできた。このことは、感情の行き違いから問題が生じたときに生徒自ら話し合いを持って解決しようとする姿勢を育成し、望ましい人間関係づくりに役立てていけると考える。

「すご〜い。」「思い
つきもしなかった。」



写真3 シェアリングの様子

表10 「無人島 SOS」の振り返りシートより抜粋
【2】 友達の意見を聞いて「なるほど!」と感心したことや、ユニークな意見を書き出してみよう。

友達の名前	友達の意見のどこにユニークさを感じたり、感心をしたのか?
○り○	「へん!... 食べ!」ものを作るためにとか... 考えたのが、
○±○	海のちず!... 海のじょうほうを知らぬとめとかさ!!
○±○	へん!とへん!... 考えてる!... でも... すごい!と...!

アクティビティを通して、人にはいろいろな意見があることに
気づき、ユニークな考え方に感心したり、改めて友だちを
見直したりすることができた。

男女力を合わせてを新聞紙
でタワーを作りました。

楽しい〜♪



写真4 新聞紙タワーを製作中

(2) シェアリングの工夫を通しての検証

自己・他者理解をさらに深めるために、話し合いによるシェアリングの後にワークシートや生徒の考え等を学級内に掲示し、授業後も自由に意見交換ができるように工夫した。その結果、授業中には思いつかなかった気づきを発見することができたり、生徒同士で感想を述べ合うなどの心の交流が活発になった。

授業後も友達同士で感想を
言い合い、感謝し合う様子
が見られた。



感謝の気持ちを私に
書いてくれたんだね。
ありがとう。



写真5 「たくさんの葉」の学級掲示



写真6 「新年の自分づくり」学級掲示

(3) hyper-Q-U アンケートの結果を通しての検証

前回のソーシャルスキル尺度の結果では「配慮」にバランスが傾いていた学級が、今回は全体的に「配慮」から「かかわり」に変容していることがわかり、他者とかかわりを持とうとする意識を持ち、人間関係形成能力が高まってきているのがわかった。アセスメントで個々の支援策を話し合った気になる生徒、配慮が必要な生徒の変容を見てみると、F君、Jさんは、前回同様「不満足群」に属しているが、F君はソーシャルスキルの「かかわり」が、Jさんは「かかわり」と「配慮」の両方の得点が上昇し、さらに学校生活意欲尺度の「友人および学級との関係」も改善した。Iさんは、不満足群から要支援群にプロットされ今後の継続的な支援の

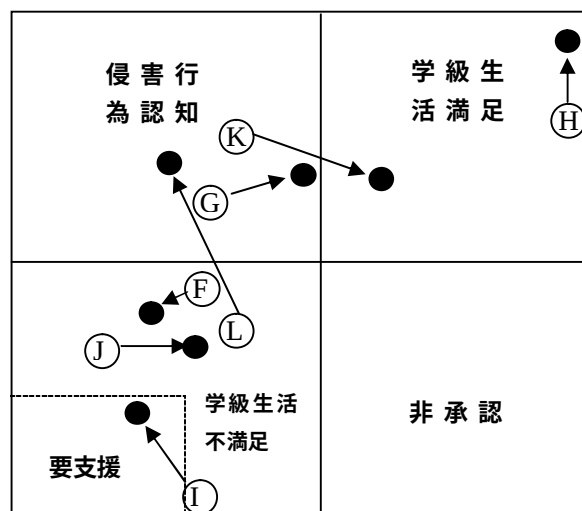


図23 気になる、配慮が必要な生徒のプロットの変化

必要性を感じる結果となったが、承認得点が約 2 倍上昇していることから、改善の方向性も同時に見て取れた。Gさんは、依然「侵害行為認知群」に属しているものの、「かかわり」と「配慮」のスキルが大きく上昇した。被侵害得点も改善し、あと一步で「満足群」にプロットされる段階まで変容してきた。I君は承認得点が大幅に上昇し、他人に認められていると感じることで、「配慮」のスキルも同時に上昇した。Kさんは、被侵害得点が大幅に改善し、「友人との関係」も良くなり、今回の結果では「満足群」に好転した。

以上の hyper- Q-U アンケートの結果と考察 1, 2 より、Q-U やソーシャルスキル尺度を活用してアセスメントし実態を把握したうえで教育相談をおこない、その中でソーシャルスキルを育成するためのトレーニングをすることで、学級が魅力ある居場所となり人間関係形成能力が向上することができたと考える。思春期の真っ只中にいて日々成長している生徒にとって、実態は常に変化することが考えられることから、成長段階に合わせた教育相談や対人関係スキルを向上させるための継続的なソーシャルスキルトレーニングの実践が必要になってくると考えられる。そのためには、道徳や特別活動の年間指導計画に系統的に位置づけ学年、学校全体で取り組むことが望まれる。

VII 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) Q-U やソーシャルスキル尺度をアセスメントすることで、生徒の実態を把握し個々の生徒の成長目標を意識しながら教育相談をおこなうことができた。
- (2) ソーシャルスキルを育成するトレーニングをすることで、生徒の人間関係形成能力を高めることができた。
- (3) 教育相談担当教諭やスクールカウンセラーが T.T 等で授業をすることで、お互いを認め、思いやる学級づくりに積極的に関わることができた。

2 今後の課題

- (1) 成長段階に応じた継続指導のために、道徳や特別活動の年間指導計画に系統的に位置づける。
- (2) 開発・予防的なカウンセリングを目指して教育相談担当教諭が積極的に学級に関わるのが大切である。そのために担任だけでなく、教育相談担当教諭の意識変容とスキル獲得を求めたい。

3 おわりに

この半年間で、人間関係の希薄な生徒がどうしたら人間関係形成能力を高められるのかを研究してきました。次年度から宜野湾市全小中学校で実施されることになった hyper- Q-U を活用して生徒の実態を客観的に理解し、担任以外のサポート源活用の視点から、教育相談担当教諭が積極的に生徒に関わり担任と一緒に生徒の成長をサポートしていけるような研究・実践を目指しました。この研究で得た成果と、再考し改善を加えていく必要がある課題をさらに追求していきたいと思います。

改めて、現場を離れ研修をする機会を与えてくださいました宜野湾市教育委員会の諸先生方、瑞慶山良常宜野湾市立教育研究所所長、久志栄徳宜野湾中学校校長に心より感謝申し上げます。

そして、学級を持たない教育相談担当の私に検証授業の場を与えるだけでなく、快く研究に協力してくれた学級担任の仲吉満里先生と生徒のみなさん、スクールカウンセラーの神保しげみ先生、検証授業にご理解・ご協力をいただいた宜野湾中学校の教職員の皆様に感謝いたします。

さらに、本研究を進めるにあたり様々な情報を惜しげもなく提供し、報告書を仕上げるまで最後まで細かく丁寧に指導して下さった宜野湾市立教育研究所の西康勝指導主事に厚く御礼申し上げます。

最後に共に励まし合いながら苦しいことも一緒に乗り越えてきた同期研究教諭の先生方、PC 操作をサポートして下さった IT サポートのスタッフ、やさしい気遣いで支えて下さったはごろも学習センターの職員の皆様、本当にありがとうございました。これからも生徒に還元できるような教育活動を目指すと同時に、常に探究心と向上心を持ちつづけ自己研鑽につとめていきたいと思っています。

〈主な参考文献〉

親里健/島袋有子著 2008 『やってみようソーシャル・スキルトレーニング』 グリーンキャット
企画・編集 河村茂雄他 3 名 2004 『Q-U による学級経営スーパーバイズ・ガイド』 図書文化
監修 國分康孝 編集 林伸一他 4 名 2001 『エンカウンターで学級がかわる』 図書文化